

〈はじめに〉

## 貧困化の現状について

法政大学現代福祉学部教授 湯浅 誠

あらためまして、こんばんは。湯浅と申します、よろしく申し上げます。

最初、「触りの概況を5分で話してください」とのことなので、簡単にお話だけさせて頂きます。

貧困全般の概況のことで、学ばれている方は「知っているよ」と思うのですが、日本の貧困という概念はOECDという、いわゆる先進国グループとも言ったりしますが、経済開発機構が統一的に出している基準によって出されています。日本の出し方と、デンマークの出し方、アメリカの出し方は基本一緒です。その出し方の中で日本の場合は16.0%が最新の数字になっています。2012年の段階のデータに基づいています。16%というとは6人に1人位になります。日本の人口は1億2千万ですから、ざっと計算して2000万人になります。2000万人という数が「貧困」という言葉とうまくぴったり合わないというのが、私たちが色々と抱えている面倒くさいところ。6人に1人っていうとすごく多いってことになるのですが、例えばこの教室は50人ですから、6人に1人だと10人近くいることになる。「貧困」という言葉と「この中に10人いる」というイメージがうまく頭の中で合致しないということが日本ではよく起こります。どういうことなのかというと、ここで言っている概念が「相対的貧困」というややこしい概念を使っているから。私たちが一般的に「貧困」というと、「敗戦直後の食うや食わず」の状態とか、「アフリカの難民キャンプの子ども」とかの貧困を思い浮かべちゃう。それは概念上でいうと絶対的貧困になります。それを思

い浮かべちゃう。「6人に1人だと、飢えかけている人が2000万人もいるのは本当か？」と言うと、そういうことではない。じゃあ「相対的貧困とはどういう概念なんだ？」と言うと、色々しゃべりだすと5分過ぎちゃうので、そのギャップだけを説明したいと思います。

とりわけ、日本の場合、私が深刻だと思っているのは増え続けているということ。調査の度に増えている。特に気にしているのは、今回のテーマの「子どもの貧困」ということになります。子どもの貧困は、まず全体は2009年に関して16.0%でした。2012年に関して16.1%。0.1ポイント上がったなとなります。子どもの貧困に関していうと、2012年の数字だと16.3%になっちゃっている。日本全体の貧困率よりも子どもの貧困率が上回っちゃっている。かつてはそうではない。最新の数字でいうと上回った。これは急激に社会の中で貧困の子どもが増えていることになる。数でいうと、330万の子どもたちが日本の中ではOECD基準という貧困の状態にあって、それが社会にどういう影響を及ぼしていくのかが心配しているところ。私たちがそれをどういう問題として受け止めて、それに対してどういうアクションを起こすかが私としては社会の宿題だと思っている。今日はそういう話を現場の皆様と一緒にしたいと思っています。